

かぎろひ

南 奈乃

日が昇る前のひと時、淡い董色の空に茜の光が拡がり、刻々と明るく染めていく様を、妙は暫く見あげていた。

晩秋に現れる、朝焼けとはちがう虹を帯びた鮮やかな曙光を、万葉の昔から「かぎろひ」と呼ぶ。

明け方に目覚め、隣の部屋に寝ている嫁を起こさぬように、縁側を忍び足で厠に行った。齡よりずっと若いといわれ続けた妙も、七十を過ぎてめっきり体の衰えを感じるようになった。

縁側で「かぎろひ」の立つ空を見上げてみると、冷えてきたのか、喉の奥から体を震わせて、発作のように咳がこみ上げてくる。あまり咳き込んで寝ている家族に気づかれてしまうと、袂で顔を覆う。ここ暫く続いていた高熱はやっと下がったが、頑固な咳が続いている。医者の子には、安静にしているようにと言われていた。

妙も同じく医者の子であるから、息子以上に自分の体はわかっていてもつもりだ。大和の国御所村の戸毛とつけという片田舎の宿場町で、長年患者を診てきた。戸毛は、大坂方面と紀州、伊勢を繋ぐ高野街道の要所で、峠という意味から来ている。名前の通り、どこまでも山々が連なり、その山脈が南へ吉野の山々へと延びている。

父祖の代からの医家に生まれた妙は、婿を取り後を継いだ。今は息子が継いでいるが、一緒に診療を続けている。

明治になり、以前は徳川幕府の天領だったこの村も、奈良県葛上郡御所村という名前で呼ばれるようになった。

部屋に戻って横になっても、先ほど見た「かぎろひ」が頭に浮かんでは消えた。夜と朝との間にほんの短い時間現れるだけの儂いものなのになぜだろうと、目を閉じたまま考える。もしかしたら、あれは「極楽」と呼ばれるものからの、来迎の兆しだったのだろうか。

古い記憶が、急に蘇ってくる。遠い過去と近い過去が、入り混じって、きちんと編まれていた思い出という織物が、どんどんほつれていく。いつだったか、あのような「かぎろひ」を見上げたことがあった。その時に出会った人々こそ、「かぎろひ」のように今は思える。

文久三年（一八六三年）のちょうど今頃、妙が四十八歳の頃である。

その夜は、遅くなってもなかなか寝付けなくて、布団の中であれこれ寝返りを打ちなが

ら考え事をしていた。当時の妙はとても寝つきが悪く、眠れないまま夜明けを迎えることもままあった。月のものがなくなり、それと同じくするように妙の身に次々と変化が起った。

一昨年に夫が亡くなり、昨年は長男が大坂へ医術修行に行ってしまった。夫が生きていた頃、住み込みの弟子がいて活気のあった家は、彼らが去ってからすっかり寂しくなった。今では、九つになったばかりの次男と、年若い下女のフミと三人で暮らしている。長男の成行が修行を終えていずれ戻ってくることを楽しみに、医家の看板を守っていた。気がかりは、この長男のことだった。妙は起き上がって、縁側に面して置かれた文机に置いてある成行の手紙に眼を遣った。半年前に届いたものだ。

手紙には、幕府の執政に不満を持つ若い浪士が大坂や京都に多数集結していることや、彼らが血腥い事件を起こしている様子が書かれていた。黒船の来航以来続いてきた、異国に対する幕府の弱腰のせい起こったことだと書いてある。浪士に味方した考えだった。一方で成行は、このまま大坂に留まって蘭学を学び、いずれはこちらで開業することを考えているとも書いてきた。大坂の夫の実家で遊学することを勧めたのは妙だったが、医術を学び後を継いでもらおうという自分の目論見が大きく変わり始めた。それにしても、これまで帰りたくないというようなそんな素振りにはなかったのに、随分急な話に思える。一度、故郷へ戻るようにと返事を書いた。直接会って相談したかった。ところが、それきり帰ってくる気配はおろか、便りもないままだった。

「ご時世なのか、まだ九つの省行せいこうさえ「剣術修行」をやりがる。通っている塾でも、勉学をするより子供同士で刀に見立てた竹の棒を振り回して、剣術の真似事しているほうが楽しいようである。

そんななか、事件が起こった。

八日前の晩、近くの五條代官所が突然に何者かによって襲撃された。代官をはじめ役人たちは皆殺しになり、代官所は火を付けられ炎上した。いつもなら旅人たちが賑わう街道筋の店も、近頃は早くから戸締りをし、ひっそり息をこらしている。代官所襲撃も、成行が手紙に書いていた、幕府に不満を持つ京都の公家や浪士の一味らしいと聞いた。その中には、医者も含まれていたらしい。

今朝は、何発か大きな砲声が、山々にこだまするように響いてきた。患者の話では、隣の高取藩にある大砲の音らしい。幕府側の要請で、襲撃に対する報復を仕掛けたのだ。

「奥様、いよいよ戦ですやるか」

いつも荒くれの雲助や木こりに凄まれても、睨みかえすぐらい気の強いフミも、大砲の音を聞いてさすがに不安そうな顔をした。成行が帰ってくれていたなら、どんなにか心強いのにと思わずにはいられない。

時々雨戸が風でガタガタ音をたてる。やっとうとうとしかけていても、眼が覚めてしまふ。

再び外で音がした。今度は風の音ではなかった。門を叩く音である。

縁側を小走りする音が近づいてきた。そのフミの「奥様」と怯えた声が聞こえる。

「至急、診てもらいたいとおっしゃられていますねんけど、どういたしましょ」

妙は起き上がり、

「患者なら、放ってはおかれへん。出てみます」

フミを安心させるように、わざと平静を装った声で返事をした。

寝巻きの上に羽織を着て、部屋を出た。晩秋ともなると、山沿いの村では昼間は汗ばむ陽気でも、夜はぐつと冷え込んでくる。冷たい廊下を踏みしめながら、暗闇のなかを手探りで玄關に出た。庭木の向こう、門のほうから微かに灯りが漏れている。

息をひそめて、音を立てないように門に近づき、ぐぐり戸の隙間から窺うと、馴染みのあるま屋の姿が見えた。くるま屋とは、近くにある大きな水車小屋を持つ家の屋号で、水車で麦や蕎麦をついている。白髪混じりの頭に手拭で頬被りをし、齢は妙と変らないのに腰を屈めた姿がひどく年をとって見えた。親の代からの、患者だった。

つい気を許してぐぐり戸を開けてみれば、くるま屋の横に提灯を下げた大きな男が立っていた。「しまった」と思い、扉を閉めようとした途端、そこへいきなり槍のようなものが突っ込まれた。

「医者はお前か」

妙が声も出せずにいたら、槍を差し込んだ男が聞いた。

「そうですね。女先生やけど、この辺ではいちばん近いですよって」

くるま屋は、怯えと媚を含んだ声で代りに答えた。

「怪我人や。ちよつと傷が深いさかい」

男の声には、聞き覚えはなかった。二人以外に、人影は見当たらない。往診を頼むつもりらしい。どのみち、女所帯に彼らを入れたくはない。

「往診でしたら、準備をしますので、ちよつと待っていて下さいや」

月明かりに鈍く光る槍の穂先を見つめながら、やっとな返事をした。一旦家へ戻りながら、

相手の正体もわからないまま承知したことを後悔した。手探りで玄関に戻った時、戸口に掛けた手は小刻みに震えていた。

「往診に行ってくるから、留守番を頼みますで」

フミにそう言った。

朝方に聞こえた大砲の音が、よほど心に残っていたのか、

「奥様。うち、一人で留守番なんて、嫌です」

フミは甲高い声を上げた。

「里へ帰りたい」

泣き声になった。

「他に、誰がいてるのです」

妙は叱りつけるように言った。

「息子のこと頼みましたで。もし、朝になっても帰らなかったら、番所に駆け込みや」

幼い息子は、今頃すやすやと寝息をたてているに違いない。隣の部屋の省行に気遣いながら、いつも往診に着る焦茶縮緬の羽織に袖を通し、煎茶縮の御高祖頭巾を被った。そうすると、少し気持ちが落ち着いてきた。表の間に戻ると、白い晒木綿を畳んだものを、往診に提げていく藁籠に入れた。それにしても、なぜくるま屋が連れてきたのだろう。隣の大男は、村の人間ではなさそうだった。

くぐり戸を出ると、大男は妙の顔をちらっと見、顎をしゃくると前を向いて歩き出した。くるま屋に近づき、小声で話しかけようとしたが、怯えた様子で口到人差し指を当てて見せると、もうこちらに顔を向けようとはしなかった。

静まりかえった街並を抜け、夜風に吹かれながら提灯を頼りに歩いていくと、くるま屋の大きな水車小屋が月明かりにぼんやりと浮かび上がってきた。自分の子供の頃からカタンカタンと音をたてゆつくりと回る慣れ親しんだ水車の影が、今は暗闇の中で見知らぬ怪物のように見える。

「さあ、この中へ」

くるま屋は小屋を指し示した。

男に付いて小屋の中を覗いたが、中は真つ暗で人気がない。もしや騙されたのではとくるま屋を振り向くと、彼は提灯で中を照らし出した。小屋の隅に梯子が見え、その梯子を伝って誰かが降りてきた。着物の裾を尻はしよりにして降りてきた男は、成行ぐらいの年頃の若者に見えた。妙の恐怖心が少し和らいだ。

「あんたが医者か？」

この男も、怪訝そうな顔をする。女の医者とは思わなかったのだろう。

「昇れるか？」

梯子を指差して聞いた。天井裏に怪我人を運んだらしい。ここまできて、帰ることもできない。妙は御高祖頭巾を被ったまま、羽織を脱いで畳み若い男に手渡した。腰紐を取り出しタスキがけをし、着物の裾を帯に挟んだ。梯子を昇るのは、子供の時以来のような気がする。妙は一人娘だったが、跡継ぎとして男のように育てられた。そのせいもあり、昔から木登りして柿やミカンをとるのは得意だった。身軽に昇り始めると、藁籠に羽織を乗せて片手に抱え、若い男が後ろから付いてくる。暗闇に目が慣れたのもあって、視界に天井裏の様子が広がってきた。太い梁が空間を貫いて横切り、隅に蠟燭が立てられてその横に三人ほどの男が座り込んでいた。

「医者が来たぞ」

呼びにきた男の声に、中の男たちが一斉に顔をあげた。

「怪我人は、どなた？」

妙の後から昇ってきた若い男が、指差した。

天井が低いうえに埃っぽく、むっとするような醜えた臭いが漂っている。怪我人の呻き声がする。

呻いている男に近寄り、脈を取った。手の柔らかい感触で、この男も若者だと分かった。

「内股を撃たれはったんや」

さつき出てきた若者が、蠟燭の灯りをこちらへ近づけてくれた。「ふん、ふん」と頷きながらふと男を見ると、浮かび上がった顔は、旅役者の誰かに似ていた。夫が亡くなる前は、芝居の一座が村に来るたび見物する余裕があった。それが、とても遠いことのように思える。

「俺は、何かすることあるか？」

聞く若者に、母屋に行つて焼酎を手桶に一杯貰つてくるよう言いつけると、風呂敷の中から白い晒の布を取り出し、手早く端を啜えると細く裂いた。

若い好い男だったので一瞬ためらったが、着物の裾をはだけ、捲りあげ傷の具合を見た。股間から腿にかけて真っ赤に染まっている。相手のほうも、女に股間を見られることに、羞恥を感じているだろうと思った。自分が恥ずかしがっては余計に相手も辛かろうと、遠慮なく手を伸ばし、傷口を診た。男は顔を背けて痛みを耐えていた。

さっきの男の言葉どおり、銃創のようだった。内科を専門としているうえ、吉野の田舎で銃創を診ることはまずなかった。額に脂汗が浮かんでくる。自分にできることは、たいしてないことに気づいた。股の付け根に、止血の為、白い晒をきつく巻いた。

その時ふと、弾を取り出さなければならぬのではないかと思ひ至る。大坂で修行している長男の手紙に、そんなことが書いてあった気がする。蘭学者は、自ら刃物で患者の体を切り裂くとか。紀州には、痛みを感じさせない薬を用いて、患者を眠らせ治療する医者があった。しかし、妙にはこれ以上どうすることもできない。

若者が運んできた焼酎で傷口を消毒し、晒おうぼくに黄檗おうれんや黄連おうれんを調合した軟膏を塗りつけ、その部分に当てて上からまた晒を巻いた。弾が貫通しているのか確認しなかったが、今無理に動かすことは難しいと思われる。夜明けまで待ち、ある程度出血が収まれば傷口を縫えばいいのだろうと思った。

焼酎を運んでくれた若者は、横に正座し熱心に治療の様子を見つめていた。

「他に、怪我をされた方はいますか？」

振り向いて、尋ねると、

「それなら、拙者も頼む」

遠慮がちな声が聞こえた。

立ち上がると梁に頭をぶつけるので、声のした辺りにいざって行った。少し動いても、梁に溜まった細かい土埃がばらばら落ちてくる。床はざらざらしていて、着物が埃まみれになった。

横たわっていた男を起こし、手足の傷に軟膏を塗り包帯を巻いた。彼は武士らしい様子で、礼儀正しかった。「かたじけない」とすまなそうに怪我をした傷口を見せる。当初の、命の危険を感じるような強い恐怖感おそろしさは、徐々に治まってきた。

さっきの若者の言葉は地元の訛りがあったが、他の男たちはどうも他国者に思える。治療をした男に、思いきって聞いてみた。

「あなたは、大和の人？ それともどこから来たの？」

「それは言えぬ」

男は、きつぱりとした口調で答えた。

その時、横の男が、

「もう、土佐へ帰ることは多分かなわんじやろうな」

呟くように言った。

「言うな」

隣の男がすぐに遮った。

「今さら、隠したって仕方がない。それに脱藩浪士とはいえ、一度は京の帝に勅命を受けたのだからな」

その時、さっきの深傷を負った男が、いきなり口を開いた。

「こんな怪我など、しれたもの。また刀をとって、明日こそ高取藩の芋侍に一泡吹かしてやる」

肩で激しく息をついた。礼儀正しく見える彼らが、やはり代官所を襲い、代官を晒し首にしたのだ。

妙は、殺された代官とも面識があつた。流行り病の時期に、大勢の村人を治療した時は、わざわざ代官所に呼び出され、褒美をいただいた。幕府の役人とはいえ、人徳と知が備わった穏やかな方であり、敬慕の気持ちを抱いていた。少なくとも、あんな酷い殺され方をされるようないわれはない方だと思う。この大和の地で幕府も朝廷もなく平安に暮らしてきた妙たちのところに、彼らは戦を持ち込み、勝手に殺し合いをはじめたのだ。自分たちは、巻き込まれたに過ぎない。

武士ではない妙に、敵味方という観念は浮かばなかつた。目の前の傷病者を、どうしたら助けられるかしか今は考えられなかつた。それに、自分の態度次第で、彼らが危害を加えないとは言いい切れない。正直なところは、家へ早く無事に帰りたいかつた。

医者を目指し蘭学の大家に弟子入りした女が、師匠に手篋めにされ、父無し子を生んだという噂を最近聞いたばかりだつた。学者でさえ、女を前に魔がさしてしまうのだ。男にとつて、弟子や医者として接する以前に、女という生き物は子を孕ませる道具にしか見えないということか。自分はもうそんな年ではないとはいえ、相手は人を殺してきたやつらだ。夫の形見の懐剣を持ってくればよかつたと思うと、後悔と恐怖で背中が熱くなりじわじわと汗ばんでくるようだ。

「名前を名乗らず、失礼した。わしは、小村、鉄太郎、帝の勅命を受け、中山卿を総大将に……」

男は今度は妙に向かって話し続けようとするが、痛みのせいで途切れ途切れに小さく、よく聞き取れない。そんな挨拶より、安静にしている必要があつた。

「何言うてなはんね。まめに包帯を替えて、じっと大人しい寝ていないと、傷口が膿んで命さえ危ないでつせ。」

妙は聞いていられず、つい口を挟んだ。

「戦いに勝たなければ、どの道死ぬしかない。じつと大人しく寝てるなんて、死ぬと言われていると一緒にじゃ。また刀をとれるようにしろ」

鉄太郎と名乗る男は、がばっと起き上がると妙に掴みかかろうとした。

「寝なさい。治らんで、ええんか」

反射的に怒鳴り声をあげると、妙はその場で睨み返した。男たちに威嚇されると、長年の体験から高圧的態度をとることが常になっていた。治療の際、患者と部屋に二人きりということもあり、女であるがゆえに、時には男のからかいや嫌がらせに遭ったのだ。若い時には、大柄な体格に袴を付け男装をすることで、何とか乗り切った。ここで眼を逸らしたら、何をされるかわからない。睨み合いになった。

先に目を逸らした鉄太郎は、再び横になった。

「何だか、母上に、叱られてるみたいだな」

その皮肉っぽい口調に、妙は息子を思い出し、女としてでなく母と見られたことに、少しほっとした。

「あなたがいなくなったら、お母上は悲しまはるでしょうが？」

柔らかい口調で、諭すように言った。

「わしには、年の離れた弟がおる。そいつに家督も譲ったから、問題ない」

妙は、はっとした。跡継ぎのことばかりを考えている自分に、成行が男の口を借りて責めているような気がしたからだ。

そうではない。母として、息子の身は心配なものだと伝えたかった。もしかしたら成行も、こんなふうにごどこかで危険な目に遭っているかもしれないのだ。

「あなたたちのなかに、医者もいるって噂だけど、息子がいたらと思うと、親としてはねえ」

息子のことを話した。

「五條に住むものや、何人か医者は仲間にいる。代官所の様子を探ってくれた。彼らは本隊にいますが、おぬしの息子ではないだろう」

さつき手当てをした男が、教えてくれた。

やはり、医者はいた。息子ではなかったものの、代官所のお膝元で、自分のように恩義を感じる者もいれば、襲撃の手引きをする者もいる。

鉄太郎は、故郷のことを思い出したらしい。

「わしの故郷も、こんな山の谷あいにあるんじや。景色がよう似ている」
遠い目をした。

「この方も、土佐のお人？」

妙は、土佐という地名を漏らした男に聞いた。

「そうじや。わしらは、海を渡ってきた。海を知っておるか？」

からかう様に聞かれたが、無論知る由もない。大坂でさえ行ったことがない妙にとつては、遙か遠い所だ。それが、ここに似ているとは思議な気がする。

背後から、寝息が聞こえた。見ると、さっきの若者が、壁にもたれてウトウトしている。だいぶ夜がふけてきた。

「もう、いいぞ。早く息子のところへ帰ってやれ」

鉄太郎は言った。

そう言われると、逆に傷のことが気になってくる。傷口の深さを考えると、早急に縫ったほうが治りも早いのだ。街道筋でおこった喧嘩で、怪我をした人間の治療はしたことがあった。

代官たちを売った五條の医者には、後で「なんだ、この治療は。だから、女の医者は」と言われるのは絶対に嫌だった。「国手」といわれた父の顔に泥を塗るような、治療はしたくない。自分にも医者として意地と誇りがあるのだ。このまま放ってしまつて、いいのだろうか。

それに運がよければ、彼らはどうにかして生き延び、故郷へ帰れるかもしれないではないか。

迷つたあげく、

「じゃあ、一度帰るけれど、また様子を見に来るから」

妙は、言ってしまった。

羽織を着て、水車小屋を出ると、目の前にくるま屋が立っていた。

「おおきに。悪かったな、先生。ほんまに助かったわ」

夜道を送ってくれるらしく、一緒に歩き出した。

「送ってくれんでも、すぐそこやさかい」

遠慮してみせると、

「いや、わしはやっぱり、恐れながらと番所に通報しようかと思つて。先生ももう、関わらないほうがいいで」

辺りを見回し、耳元で囁いた。

「匿ったのに、どうして？」

「匿ったん違うんや、押しかけて来っただけで。お上から、逆賊追討の命令がきてるんや。味方やと思われたら、わしらまで、捕まってまう」

人が良く気の弱いくるま屋は、これ以上の係わり合いは持ちたくないようだ。

「でも、あれだけの深傷を負ってるのに。まだ、治療も途中だし」

妙は、思索しながら言った。今の体でどこかへ移動するのは、命に関わるかもしれない。

「もうちよつと、待って。お願いやから、せめて出血が治まるまで」

くるま屋は立ち止まり、少し考えるふうをして、来た道に戻っていった。

フミから省行がぐっすり眠っていて、家の中も変わりなく無事であることを聞くと、妙は口を訊くのがおっくうなぐらいどっと疲れが出てきた。そこで、布団に入りしばらく仮眠をとることにした。ここ暫くは、往診の依頼もない。少しは眠っておかないと、もしもまた急患が来た時に、辛くて体がもたないような気がする。息子の布団を直してやり、襖を閉め横になったが、体のこわばりが解けず、神経が高ぶってなかなか眠れそうになかった。

やっとうとうとしかけた頃、廊下の足音で再び目が覚めた。

「奥様、奥様」

またもや、フミの慌てふためいた声がした。

「また、お武家様が、訪ねていらっしやいました」

気がつけば、もう日が高い。妙は起き上がり、急いで身づくろいをした。まだ、頭はぼうつとしている。もしかしたら鉄太郎の容態が急変したのかもしれないし、それなら放つてはおけなかった。

玄関を開け、門に近づくと、

「早く、門を開けよ」

と、威嚇するような声が聞こえてきた。どうも言葉から、昨夜とは雰囲気が違うようだ。やれやれ、いったい何が起こっているのか、頭が麻痺しているせいか、恐怖感ももうなかった。

門を外すのを待っていたように、大きく門が開かれ、外には数人の武士が立っていた。

白い鉢巻には、高取藩の紋所が入っている。タスキ掛けをし、槍を構えていた。

「我々は、逆賊追討のため、この辺を搜索しておく。近くの水車で粉をひく、くるま屋という店を知っているだろう。そのあるじの話では、行き先をおぬしが知っているということだが」

「はあ？ いったいどういうことで？」

くるま屋は、やっぱり番所に鉄太郎たちのことをご注進に行ったらしい。多分ご内儀にでも、煩く言われたのだろう。踏み込んだ時には、もうほとんどが逃げた後だったのと。役人たちに彼らの身を直接渡す気になれず、番所に行く前に追手が迫っていることを知らせたのかもしれない。

どちらも敵に回したくないと思った、くるま屋らしいやり方だった。

「どこへ行ったか、知ってるんだらう？」

男の一人が凄んで見せた。

それにしても、どうして妙の名前が出たのだろう。迷惑の一言だった。それに、あの体で逃げていった鉄太郎たちが心配だ。

少し南の奉膳ぶんぜんというところに、妙も一目置く腕の確かな医者が出た。そこへ行ってくれれば、若い彼なら蘭方の治療もできるはずだが。

黙りこんだ妙を不審に思ったのか、

「話さないで、この家を搜索するぞ」

一人が、イライラした様子で怒鳴った。踏み込まれたら、家の中を滅茶苦茶にされるところか、若いフミや若い省行に手を出すかもしれない。

「私は、ここで治療したわけじゃありません。搜索するぐらいなら、番所へ連れて行って下さればいいでしょう」

妙の言葉に、男は目を光らせたまま、黙った。

そして、そのまま妙は番所に連行されることになった。

行き倒れの旅人を診察することもあったので、番所の役人とは普段から顔見知りだった。番所に行けばきつと疑いは晴れるはずだ。街道のほずれにある番屋まで武士に囲まれ歩いていると、両側に並ぶ旅籠や茶店の閉じられた扉の隙間から好奇の視線で見られているような気がして落ち着かない。それに、今度はフミにさえ声も掛けられず連れて来られてしまった。今頃、きつと心配でおろおろしていることだろう。息子のことも心配だった。

商店が途切れると、田んぼや畑などいつもならのどかな風景が道の両脇に広がってくる。今は田んぼにも畑にも普段と違い人の姿はなく、昼下がりのうらかな陽光に照らされて、

彼岸花だけが列をなして血まみれの死体のように並んでいる。妙は、見ないように下を向いて歩いた。

到着してみたら、まったく見知った顔はなく、狭い番所がまるで屯所のように、大勢の武士たちでごった返していた。しかも、紀州藩の紋所を鉢巻や陣笠に付けている武士もいる。

上役らしい武士が出てきて、うむを言わず奥のほうへと連れて行かれた。奥には罪人を留め置く部屋がある。板敷きの小さな部屋で、そこで診察したこともあった。

「取調べをするから、そこで待ってもらおう」

男は板戸を開けると、顎をしゃくってみせた。

「私は、彼らの行き先は何も知りません。ただ、くるま屋に呼ばれて治療をしただけで」最後まで言い終わる前に肩を押され、よろめいた背後で扉が閉まる音がした。

目を上げると、真昼の陽光が小さな格子戸から、薄暗い部屋に差し込んでいる。そこには、柱へ縄で後ろ手に繋がれた男が一人、座り込んでいた。

振り向いた顔を見ると、男は昨夜尻はしよりで消毒の手伝いをしてくれた若者だった。彼は驚いた様子でこちらを見つめ、また目を伏せた。

カタンという錠を落とす音がした。

「あなた、捕まってしまったの？」

妙は尋ねた。

「怪我をしている人たちは、どうなったの？」

「わしや、何も知らんぞ」

男は、昨夜と違いぶっきらぼうな声で答えた。

「そんなこと言ったって、誰のせいで私はこんな所に入れられたんや。あんな真夜中に、誰が治療してくれたと思ってるんや」

妙は、男の態度にかつとなった。

「そやかて、あんたがわしに口を割らせようと送り込まれたんやろ。わしは、命に代えても絶対喋らんぞ」

彼は、妙の怒りにたじたじとしながらも応戦した。

「私を幕府方の犬だというの？ とんでもない。こっちこそ、あなたたちの味方と勘違いされて、捕まったんやからね」

男は大倉正吾と自らを名乗り、自分の家は吉野の庄屋で、代々南朝の御陵を守ってきた

と言った。朝廷のためにひと働きをしたいと思って、鉄太郎たちの募兵に馳せ参じたものの、途中で仲間とはぐれ、到着したのは本隊が高取軍に大敗した後だった。戦場をうろろしていたら、鉄太郎が組織した別働隊に拾われ、高取城下に火をかけるための枯柴を担ぐ人足として夜襲に加わった。負傷した鉄太郎を背負い、必死で高取藩の領地から脱出してきたという。

吉野の十津川には、普段は田畑を耕したり木こりをしながら暮らしをたてている、郷土と呼ばれる人たちがいた。彼らは直接大名に仕える武士ではないが、苗字帯刀を許されている。南北朝の時代より、彼ら吉野の民はもともと幕府より朝廷に対する忠誠心が強いのだ。

檄文を撒いた鉄太郎は総裁と名乗っていたそうで、大物の彼を幕府側は必死に追っているらしい。

「総裁はこれから、新しい世の中を作るんやて書いてはった。幕府を早く倒して、京の朝廷を中心にした新しい政府を作らないと、この日本が異国に侵略されてしまうんやて。幕府の考え方は、今の時代にはもう古いんやで。これからは、幕府とは違う新しい考え方を持った政府が必要なんや」

正吾は、目を輝かせて話し続ける。それは長男の手紙を思い起こさせる内容だ。

「医者先生は、幕府側に付くんか？ 総裁は年貢を半分にしてくれるし、わしらを武士として取立て、扶持米をくれるんやで」

「武士になって出世して、楽な暮らしがしたいのやな」

妙は、皮肉っぽく言った。山の民は耕作できる土地が少なく、年貢を納めるのに苦労していた。大雨で水害が起こるたび、その僅かな田畑も根こそぎ奪われてしまう。

彼らにとって、暮らし向きが楽になるなら、幕府とか朝廷とかは関係ないのだろう。

「出世しようという野心だけで、飛び込んだわけじゃないんや。わしには許婚がいたが、その娘はひもじさに耐え切れんと、小さい弟と妹を飢えさせんがために、自ら身売りして村を出て行った。そして悪い病をうつされて、死んで村へ帰ってきたんや。そのやつれた死に顔を見たとき、どれだけ辛かったか。何もしてやれなかった自分が情けなくて、涙が止まらんかった」

悔しそうな顔をした。

「でもそのために、代官のように何の罪もない人々を殺してもいいの？ 代官様の家族もどんなに悲しんでいるか」

「わしだって、人殺しはしたくない。でも、世の中を変えるためには仕方ないやないか。代官やあんたは、飢えたことはあるか？ 死んでいく人間の気持ちなどわからへんやろうが」

まくし立てると、正吾はむすつと横を向いてしまった。

妙は、街道筋にガリガリに痩せた物乞いが増えていることを思い出した。彼らのような境遇を、経験したことはない。ただ、医者として、これまでたくさん死というものに向き合ってきたつもりだった。

外から漏れる光の色が暗く変ってきた頃、板戸の外に人の気配がした。

板戸が開き、あてにしていた顔見知りの役人が入ってきた。妙を見ると、黒光りした顔をてらてらせ、

「先生、困りますがな。ちやあんと喋らんことには、出すことはできませんで」

にやりとして、目配せをした。親指と人差し指を繋げてみせる。妙は呆れて、がっかりと首を振った。急だったので、金子は持ってきていない。そんな返事に、役人は再び素知らぬ様子になり、妙から正吾の方に向き直ると、

「おいつ。取調べだ」

そう言い、正吾の縄を解いた。そして正吾を連れて部屋を出ると、再び板戸に鍵を掛けた。夫が生きていれば、こんな扱いには絶対ならなかったはずだと思つと、閉まった板戸を見つめて溜息が出た。

しばらくして、激しい音とともに男の叫び声が聞こえ、妙は胸の動悸を覚えた。正吾が、かなり厳しく尋問されているらしい。叫び声は何度となく聞こえ、絶叫に近くなってきた。

高取藩は、昨日の戦の残党狩りをしているのだ。拷問をされているのかもしれないと思つた。

二十歳の頃、拷問を受けて亡くなった死体を見たことがある。その頃まだ元気だった父に、医学の勉強のためにと代官所に連れて行かれた時のことだ。父に、被せられた筵を捲るように命じられ、恐る恐る足元から捲り上げると、その体は全身のあちこちに真つ黒な痣があり、しかも首から上がなかった。激しい臭気が、妙を襲った。父は、蹲って傍らで吐いている妙に、

「本当に医者になる気ならば、これは避けて通れない道だ。しっかり見ておけ」

と冷たく言い放った。死体など見たくなかったが、父の命令は絶対だった。

あの時、なぜ代官たちがあんな酷いことをしたのか、何も知らず、知ろうとも思わぬま

まだだった。本当に悪人だったのか、それとも、もしかして正吾のような人間だったとしたら。これまでの自分は、本当は何も知らなかったのか。妙は耳を塞ぎ、正吾が尋問から早く開放されることを祈った。

何かがぶつかる音がして、板戸が開いた。正吾は両手を縛られたまま、転がるように中に飛び込んできた。床にうつ伏せになったまま、呻いている。赤く染まる体に這う何本もの太い蚯蚓腫れを、妙は見つめていた。

次は自分の番かもしれないと思うと、あの死体が頭に浮かんでくる。もう息子には、二度と会えないのだ。悲しさと悔しきで、胸の内が煮えたぎる。

なかなか取調べは、始まらなかった。気が付けば、外はひっそりとして物音もあまり聞こえない。あれだけ沢山いた武士たちは、妙たちを置き去りにして、どこかへ出陣して行ったようだ。正吾は気を失ったのか、口を訊く気力がないのか床に転がったままだ。

夜になって、たまらなく空腹を覚えた。それでも、昨夜からの疲れもあり、いつのまにか眠っていたようだ。

どこどかと誰か複数の足音が、中に入ってくるのがわかった。起き上がると、辺りはまだ真っ暗だ。提灯が掲げられ、紬の羽織を着た初老の男の顔が浮かび上がった。

男は横たわった正吾に足音荒く近づくと、いきなり胸ぐらを掴んだ。

「あほんだら。何をさらしとる」

語気も荒く、殴りつける。

「乱暴は、やめて下さい」

倒れたままの正吾に、思わず駆けよった。このままでは、正吾は本当に死んでしまう。男は強い力で妙を押しのと、猶も彼の背中を蹴りつけた。正吾はされるがままになっている。

「親の目の届かんとところで、こんなことにつつつを抜かしてたと。お前みたいな阿呆はうちの恥さらしじゃ」

男は、耳の鼓膜が割れそうな声で怒鳴った。

「まあまあ、そんなとこで。もう、わかりましたさかい」

提灯をさげて様子を見ていた役人は、男を宥めている。

「いや、まだまだこっちの気がすまん。仕事のイロハもまだ勉強中やのに、勝手に家を抜け出しやがって」

情けない、情けないと連呼しながら、正吾を猶も蹴り続けた。男は正吾の父親らしい。

その形相は、声ほどに恐ろしいものではなかった。

妙も、父親に打たれたことがあった。拷問を受けた死体を見せられる、少し前のことだ。

紀州藩で、著名な医者が開いた塾が評判になっていた。薬を用いて眠らせ、患者の胸を刃物で開いて乳岩を治療するという医者だ。妙はその医学塾に入学したいと思い、父に願ひ出た。乳岩は女が罹る病気であり、女医が治療すれば、若い娘の患者も恥ずかしながらに治療を受けることができるはずだ。いずれ後を継ぐと言えば、妙は、きっと父が喜んでくれると思った。ところが父は即座に首をふり、紀州行きを許そうとしなかった。諦めきれない妙は、塾へ密かに手紙を送ったが、若い女の入れる余地はないと入塾を断られてしまった。塾長から父へ鄭重な断りの手紙が届き、そのことを知ると、父は部屋にいた妙を縁側に引きずり出した。「馬鹿者」と一言叫ぶと、初めて妙を打った。妙には父の怒りがわからなかった。ただ、その頬の痛みと、死体の元へ引きずっていく時掴まれた腕の感触は今も思い出すことができる。

それから三年後、自ら選んだ婿と娘の婚儀を見届けるように父は亡くなった。母を早くに亡くした妙にとって、父の存在がすべてであり、いつのまにか目標となっていた。その姿が、ふと正吾の父と重なった。

「もうよろしいがな。逆賊の所在はわかったし。まもなく、捕まるやろうから」
役人の言葉に、やっと男は蹴るのを止めた。

そして、今度は役人に向かうと、いきなりその場に土下座した。

「こいつはわしがちゃあんと家で塾居させ、よう言い聞かせますから、堪忍しておくなはれ。頭が少し足らんのです」

そう言つて、床に頭を擦り付けるようにした。

「わしに、そう言われてもなあ」

役人は正吾の父にことばを濁すと振り向き、今気づいたように妙を見た。

「ああ、先生、変な疑いをかけてすみませんなあ。本当に申し訳ないこつて」

正吾の父を無視して、別人のように平謝りをした。

「ああーっ。総裁。総裁、わしを堪忍してくれ」

ぐったりしていた正吾は、何処にそんな元気があったかと思うほどの声で叫び、啜り泣きを始めた。

妙はやっと軟禁状態から解かれ、正吾の父と一緒に部屋を出された。役人の話では、今や彦根藩や津藩など各藩に追討命令が出され、傷ついた彼らが追い詰められるのは時間の

問題だった。

番所の前で、正吾の父は深々と頭を下げた。これから正吾はどうなるのか、お上の沙汰を待つしかなかった。

長い夜が、明けようとしていた。待たせていた駕籠に乗り一旦故郷へ戻ることにした正吾の父を見送り、家路に着こうと振り向いた時、山々の稜線が迫るように黒々と姿をあらわしていた。青みがかった雲一つない空に向かって、茜色から淡い朱鷲色に薄紫の虹のような彩を帯びて、幻のような光が広がっていった。

明治二十年（一八八七年）、妙は七十二になろうとしていた。

この日は、珍しい客があった。客といっても、今では患者の一人である。

大倉正吾は往診で見慣れた着物姿ではなく、洋服を着ていた。明治の世になって洋装の人が増えたとはいえ、この田舎ではまだ見かけることは少ない。蓄えた長い髭が、絵図で見た異国の人を思わせる。

彼は無事に釈放された後、父の後を継いだ。明治になってから杉の植林に力を注ぎ、今では板垣退助、新島襄など有力な政治家や教育者に資金援助し、政財界を影で動かす山林王と呼ばれるようになった。子供が男女合わせて十人ばかりいて、病気になるたびに妙を往診に呼び寄せた。近い距離ではなかったが、妙は駕籠に乗って往診に通い、幼子が全員無事に育つことが少ない時世に、誰一人夭折することはなく育っている。

ちようどその頃、医院も息子の代になり模様替えをしていた。息子の意見で障子をガラス窓に変え、畳をあげ板敷きの診察室にした。

「えろう、部屋が明るうなったな」

久しぶりに来た正吾は、驚いたようだった。肘掛の付いた椅子に座っている妙は、急に偉くなったみたいで彼の前では少し気恥ずかしかった。

「そうですね。息子が、西洋風にしたほうが衛生にもええって言いますねん」

明治のご一新も、ここでは何も変わってはいない。昔のままに百姓は田んぼや畑を耕作し、街道筋の店も旅人が行き交っている。診察室は変ったが、妙が仕事を続けるのもこれまで通りだ。

「あんたは、昔とちっとも変わらへんなあ。相変わらず、患者が列をなして待つとるやないか」

正吾がお世辞を言う。今の妙は、腰こそ曲がらずにいるが、白髪で鬢が真っ白になって

いる。

「それより、旦那さんは、近頃ずいぶん出世されましたなあ。日本中を飛び回っていると聞いてますで」

妙は、使い慣れない聴診器を取り出した。

あの後、成行は故郷に戻らず、大坂で開業した。本道医の妙との考え方の違いが、西洋医学を学んだ彼を大坂に引き止めた。彼にとって自分は母親ではあるが、もはや師ではなかった。

今では、自分の方が、成行の下で再び外科の勉強をはじめていた。この歳になって、西洋医学を中心にした最新の医療を学ぶことに意味はないかもしれない。でもあの時自分に西洋医学の知識があったら、と考えてしまう時がある。その思いが、妙を責める。

鉄太郎は傷が癒えぬまま、吉野の山中をあちこち転々と逃げ回った。最後には動けなくなり、薪小屋に潜んでいるところを村人に密告されてしまう。幕府軍の四十人も鉄砲隊に囲まれて、彼は切腹することも叶わず、蜂の巣になった。その瞬間、彼の脳裏に、故郷の山河や母の顔は浮かんだらうか。

ふだんは忘れていても、正吾と会うたびあの時のことを思い出す。だからこそ正吾の屋敷まで、山をいくつも越えて、駕籠に乗って往診を続けるのかもしれない。正吾は、当時のことを封印して決して語ることはない。だがある時、杉の植林に情熱をかける理由を妙が尋ねたら、昔土佐の人間に勧められたからだと言ったことがある。故郷の山を思い出していた鉄太郎が、瞬時に浮かんだ。

彼らの死からたった五年で、徳川幕府は倒れた。もし鉄太郎が生き延びていれば、故郷の土佐で、あるいは日本のどこかで、正吾のように活躍ができたかもしれない。たとえひっそりと家族と共に暮らしたとしても、生きていればそれではないではないか。

「今、吉野に鉄道を通す計画を練っているんや。そうすれば、筏を使っている木材の運搬が、どれだけ安全になることか。いずれきつと実現させるで」

いつも、たまに来ては途方もないことを言う。その熱っぽい眼差しは、あの尻はしよりの若者を思い出させる。

自由民権の活動家に肩入れしすぎ、大阪府警に取り調べられたと新聞で読んだばかりだった。「また、性懲りもなく……」と言いたくなかったが、どうせ素直に聞く男ではないだろう。彼は、彼なりの信念で歩み続ける。

いつのまにか、書生らしき若い男が戸口に立っている。

「お時間で、ございます」

男は、恭しく頭を下げ、

「馬車を待たせていたんや。また、来るわ」

正吾は、立ち上がる。

そして思い出したように振り返ると、

「写真を撮ったことがあるか？」

と、尋ねた。

「魂を吸い取られるというもんもおるが、肖像画を描かすより簡単で、いい記念になるぞ」

そう、言った。

「今さら、こんな姿を、誰が見たがりますかいな」

妙は、苦笑いで答えた。洋装なのは、写真を撮るためだったらしい。

「お母さん、お疲れですやろ」

省行が、奥の手術室から顔を出した。

「診察を交代しまひよ」

先にお昼を食べるようにと言われ、医院の奥の渡り廊下からお勝手に向かう。

孫娘をおんぶした嫁の初が、お勝手に下女のフミと忙しく立ち働いていた。孫の咲は、母親の背中でむずかかって手足をバタバタさせている。

「お初、咲は私が見ているから」

見かねて声をかけた。

「あつ。お義母はん」

初は、汗ばんだ顔をして振り向いた。

「診察交代しましたん？」

そう言うと、括り付けた背中の中の紐をゆるめ、咲を下ろそうとする。

妙は、咲を抱き取った。子守唄を口ずさみながら、背中を軽く叩いてやる。周りのみんなが、咲は自分に似ていると言ってくれている。そのせいか、育っていくにつれ、自分のいろんなものがどンドン咲に流れ込み、自分の分身になっていくような気がする。そして妙は妙でなく、ただの老女になり、いずれはこの世から消えて行くのだろう。消える前に、正吾のいう写真というものを撮るのも悪くないかもしれない。

「お前も、ばあちゃんのように医者になるんだけせ」

咲を抱き寄せて、そつと呟く。医師の国家試験というものができて、女も受験できるよ

うになった。師匠に手籠めにされる不安を抱えて、医術修行をする必要はもうない。妙が願って叶わなかった医学校にも咲は入学することができ、男と対等に医術を学べるのだ。

月日が流れ、明治二十六年（一八九三年）の秋、妙は体調を崩し、日が昇っても布団で横になっていた。

「奥様、奥様」

フミの声が、縁側から聞こえてきた。慌てた様子が、三十年前と同じだ。ただ、もうその声には、若かったあの頃の張りはない。

「患者さんが、どうしても奥様に来ていただきたいと申しております」

妙は、胸の痛みと発熱を再び感じていた。

「院長は、往診に出かけられてしまつて。具合が悪いなら、お断りしますか。子供さんの様子が、只事ではないそうで」

「わかりました。行きますから、準備しておいて」

ふらつく体で部屋を出ると、フミに聞いた。

「家はどこや。近いのか？」

フミは頷いた。縁側の向こう、庭で下男が植木の手入れをしているのが見えた。

「ちよつと、あんた、私を背負つて行つておこなはれ」

妙は、声をかけた。これが、最後の診察になるかもしれない。そんな気がした。

参考文献 「実記 天誅組始末」樋口三郎 大友出版印刷

「医譚 榎本住女史」藤森速水 関西医史学会

「葛村史」 葛村教育委員会

「横切った流星」 松木明知 SCOPÉ